



第113号
北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」
2024.8.20

10/12 (土)

中島公園内の豊平館で、定例総会・懇親会を開催します！



*写真は、過去の懇親会
& 午後のポエジアから

今年は朗読会「午後のポエジア」は8月に開催し、10月には定例総会と懇親会を行います。

(感染状況に留意しつつ) 豊平館の素敵な空間で、会員及びご縁のある皆様と共に、ポーランド文化関わる交流の楽しいひとときになれば幸いです。

アトラクションとして、ヴァイオリン演奏のほか、楽しい企画を募集します。奮ってご参加・ご出演ください。

◆ 第38回 定例総会

1F 下の広間

※本会会員向け

15:30~16:30

総会 ※入館チケットは当会が用意します

16:30~17:00

休憩・館内見学

総会のご出欠は同封のハガキでご回答ください。〆切：10月1日

◆ 懇親会

2F 広間

※会員以外の方も、お誘い合わせてご参加ください。
入場無料。ドリンク・軽食付(持ち込み可)

17:00

開場 ※これ以降の入館は無料。事前の入館・見学は¥300 自己負担

17:30

写真撮影*・引き続き懇親会

*写真は本誌や HP, FB で利用します。

19:30

終了

差し支えのある方は担当者にお伝えください。



2024.10.12(土)

豊平館にて
(中央区中島公園 1-20)

◇定例総会 15:30~

◇懇親会 17:30~



国指定重要文化財
豊平館

お問合せ先：080-4071-0956 (安藤) hokkaidopolandca@gmail.com

カティンの森事件とモンゴル・シベリア抑留 5/26

第111回例会は、『命の嘆願書』の著者・井手裕彦氏と「シベリア抑留体験を語る会札幌」の建部奈津子氏のお二人にご講演いただきました。参加者は30人、うち会員は11人でした。

今回お二人をお迎えしたのは、昨年11月に第109回例会として開催した『カティンの森のヤナナ〜独ソ戦の間に消えた女性飛行士』の著者・小林文乃氏の講演会に今回のお二人が参加され、積極的に発言してテーマの掘り下げにご協力いただいたことがきっかけでした。

お二人の活動内容についてはPOLE前号と今号で詳しく紹介されていますが、お二人の熱のこもったお話に参加者は引き込まれるように耳を傾けていました。とりわけビデオ映像による3人の抑留体験者の証言は多くの方の心に残るものでした。

(園部真幸、副事務局長)



写真撮影 尾形芳秀



死亡記録を遺族に届けたい 井手 裕彦

「ポーランド国民が犠牲

になったカティンの森事件と

日本人に降りかかったシベ

リア抑留とは、同根の強制連行被害なのです」

私が講演のまとめとして語った言葉です。

アンジェイ・ワイダ監督の映画『カティンの森』には、主人公のポーランド軍大尉がソ連軍に捕虜として連行されてから虐殺されるまでを記した日記が妻の元に届けられるシーンが出てきます。

ソ連占領下、遺品は真実を知る証拠物件になるのを恐れ、返還されていませんでした。でも生き残った部下の計らいで送られてきたのです。映画では返還後は表されていませんが、妻が夫の日記を生きる支えとしたことは間違いないでしょう。

講演後の参加者との交流会の最後、司会の方から「今後の取り組みは？」と聞かれました。即座に私の命が続く限り、やめるわけにはいかない、ある取り組みのことを答えました。

私は、遺品ではありませんが、2020年1月、訪れたモンゴル国立中央公文書館で日本人の軍医や大隊長らが最期を看取った抑留者計350人の死亡記録を入手してきました。

遺族が一番知りたい死亡の経緯や最期の様子を記した記録が少なくありません。しかし、私の情

報提供で同じ記録を入手してきた厚生労働省が遺族に届けるのは、新規に身元を特定する死亡者の45人だけです。つまり、残りの305人の記録は、私が動かなければ、厚労省の倉庫の中に眠ったままになるということです。

昨年8月刊行した拙著『命の嘆願書〜モンゴル・シベリア抑留日本人の知られざる物語を追って』(集広舎)に死亡者の氏名と私の連絡先を掲載。記録に書かれたわずかな情報からこれまでに4人の遺族を捜し出し、記録を届けました。それによって父親の死因が80年近くたってわかった遺族もありました。

個人情報への壁があっても遺族捜しは超がつく難作業です。留守宅が北海道だった死亡者も14人います。紙面を借りて以下に名前を挙げます。心当たりがあれば、私の携帯電話090-2705-9901にご連絡ください。(敬称略、括弧内は出身地の旧住所)

佐々木金男(名寄町)、立崎政信(室蘭市)、仁木島儀一(札幌市)、三浦孫三郎(栗山町)、山崎正治(長万部町)、斉藤三蔵(樽岸村)、南澤源吾(芦別町)、高崎慶吉(函館市)、井出希福(音更村)、三浦岩太郎(札幌市)、福地兼吉(愛別町)、中原金一郎(釧路市)、越中善太郎(美唄町)、坂本末吉(釧路市)

(いで・ひろひこ、元読売新聞

大阪本社論説委員・編集委員、本会会員)

抑留の体験を後世へ継承していくために 建部 奈津子

ご来聴の皆さまへ心よりお礼申し上げます。

当会の活動は今まで体験者による講演がメインでした。しかしコロナ禍に他界された語り部も数名おられ、体験者の証言をご本人から自分の耳で聴けることは残り少なくなりました。今回私がお話させ

て頂き、最初は皆さんの表情が硬く、鋭い眼差しで少し緊張しましたが、真剣に耳を傾けて下さり、「盗られないように軍服の脇に縫い付けていた親戚の叔父さんからもらった形見の腕時計と交換して枕にしていた黒パンが、夜中トイレへ行って帰ってきたら、

頭がゴツンと行くんだもの～あれっ!! あれっパンがねえ! 誰が見ているんだか～」と言った瞬間、真っ白な歯を見せて笑顔が見えて一安心しました。

補足ですが、吉田さんは4年ぶりの帰国でした。帰国船から薄っすらと薄墨色の日本の山が見えた時は、船が傾くのではないかと思ったほど、一斉に皆が日本の景色が見える方に駆け寄りました。皆数年ぶりに見る日本の景色に感動したのです。5年以内に帰国できた抑留者は9割と言われます。残りの方は最長18年余、長期間抑留されました。

いつ帰国できるか全くわからない絶望的な不安がぬぐえない生活を強いられていました。帰国交渉は当時アメリカとソ連でされていました。一時帰国が中断された時期もあります。日本で待っている家族はどんな思いだったのでしょうか。

今後皆さまもシベリア抑留に関する映画や外国の戦争映画をご覧になられた際、捕虜という表現や敗戦国という意味をどうとらえるか意識されてみ

ては如何でしょうか。インタビュー動画の中で捕虜という言葉を使うのが嫌だという語り部が多いことも頷けます。



このようにシベリア抑留を風化させないで後世へ継承していくためには、絵に遺す、インタビュー動画や本や映画で伝えることが、多くの方の目に触れるために必須になってくると思います。日本の過去についても意識し、同じことを繰り返さないよう教訓を生かせるでしょうか。

今の平和があるのは、戦争で苦しい想いをされ命からがら生き残って帰国された方々が、戦後の苦しい時期に復興に力を注がれ今日があることを決して忘れてはなりません。一枚の召集令状から命の重みを改めて考える機会になることを切に願います。

(たてべ・なつこ、シベリア抑留体験を語る会札幌 会長、本会会員)

◆アンケートの感想より (アンケート10枚、質問用紙1枚)

<p>井手氏:カチンの森=ポーランドにしぼり上手に話された。時々の質問も、参加型の意識を持たせよかった。</p> <p>建部さん:三人の体験者のビデオは説得力がちがう。生の声、叫び、願いであった。ご本人は、こういう出演でも充分伝わった。ご高齢なので、DVD 出演でよかったと思う。昨年11月の関連から今日2名の方々が実現した。こういう鎖状的にかまわない。この両名の講演、たいへん評価いたします。(70代)</p>	<p>(もともと、今回参加したのは、次のアイヌ文化に関する講演がきっかけで)どうせなら、と思って参加させていただいたようなものでしたが、想像以上に学びになるお話でした。モンゴルについて、「馬の年によって名前が変わる」ぐらいしかイメージがなかったけれど、モンゴルであった出来事を知って、たいへん衝撃を受けました。歴史を暗記科目にしてはいけないという点に賛成です!(10代)</p>
<p>井手氏の講演による大変わかりやすい丁寧な語りでビデオ(DVD)を併用し理解が少し深められ良かった。(80代)</p>	<p>これまで知らなかった事実がわかり、非常に勉強になりました。</p>
<p>ウクライナで起きている現状をみると、同じ結果を残すのではないか。ロシアは何も変わっていない。1920年生の人は抑留3年で帰国。志願してから(18~28)10年。(70代)</p>	<p>建部さんの話がわかりやすかったです。負の遺産これからの若い人に残すべき。吉田さんの話は多くの人に聞いてほしい。DVD 見て泣きました。(60代)</p>
<p>井手氏の講演:カチンの森事件については把握していましたが、同事件について認識してその後勇気を持って声を上げた日本人がいたことは知りませんでしたので、大変興味深く聴くことが出来ました。また、自分たちはどうすべきかは、とても重い課題として心に残りました。私の質問に大変分かりやすいお答えありがとうございました。(60代)</p>	<p>本日の演題にある小林多美男氏の話、大変興味深く、また改めて自分だったらどうするか質問に本当に迷いながら答えました。井手さんは、仮にこのような状況になった時は、小林氏のような生き方をしますか? また、小林氏のような生き方を他者にすすめますか?</p>
<p>井手氏の「もし、あなたがその立場に置かれたら」の問いかけと用意された3つの選択肢には何の意味もない。死が目の前にぶら下がっているような極限状態に置かれた時に、自分がどうするかなど、その時になってみないと分からないに決まっているからだ。井手氏自身は(3)を選択するとし、カンボジアでの体験を語ったが、その言葉にはまったく説得力がなく、ただの願望にしか聞こえなかった。実際の抑留体験者は、「あなたがその立場に置かれたらどう</p>	<p>する」などという問いかけは決してしないだろう。</p> <p>建部氏がビデオで紹介している語り部の方々が私たちに求めているのは、あえて苦しい記憶を掘り起こしひたすら体験を語り伝えることで、戦争の現実と正しく向き合ってもらうことである。その言葉には何百分の本以上の説得力があった。そして、そのことを持続的な取り組みとして後世へ伝えようとする建部氏らの活動には頭が下がる思いがする。(70代)</p>

ドキュメンタリー映画『Ainu | ひと』上映 6/29

本例会は空席も見当たらない満場の参加者（約35人、うち会員11人）を得て大成功でした。

その発端は、昨年春、株式会社三菱 UFJ 銀行様のご寄付により溝口尚美監督のドキュメンタリー映画『Ainu | ひと』2018 を購入したことでした。

その後、この映画が昨年9月にワルシャワで、11月～今年4月にはジャパン・ハウスロンドンにおける沙流アイヌ文化発信イベントでも上映されたことから、1910年日英博覧会に参加した沙流アイヌと B・ピウススキの交流に思いをはせ、100年前のポーランド・英国と現代の北海道をリンクさせた例会を企画しました。

平取町立二風谷アイヌ文化博物館館長・長田佳宏氏の講演では、この映画誕生の経緯のほか、平取町

のアイヌの方々60数名が取り組んだ、英国における豊かな文化事業「Ainu Stories」展が紹介され、生き生きとした活動に感動を覚えました。

上映の前に、溝口監督とポーランド在住の石塚芳明さん、三和昭子さんによる（ビデオレター）も紹介され、日本とポーランドとアイヌ文化の間の浅からぬ縁と絆を感じました。 <https://youtu.be/xTvR9F-RMXk>

司会を務めながら、いつも以上に意義深く感じた例会でした。講師の長田館長、溝口監督、ビデオレターにご参加の三和さん、石塚さん、そしてご来場の皆様に心から感謝申し上げます。（例会担当 熊谷敬子）

ロンドンで沙流のアイヌ文化を発信する

～1910年と2023年の取り組みを主として～

長田 佳宏

ジャパン・ハウス ロンドン（以下、JHL）と平取町、北海道大学による協働展覧会「Ainu Stories - Contemporary Lives by the Saru River」が2023年11月16日～本年4月21日までの約5か月間、ロンドンにあるJHLで行われた。



1. 展覧会開催の経緯

事業の構想が本格的に動き出したのは2019年で、JHL のキュレーターであるサイモン・ライト氏と北海道大学の加藤博文教授、二風谷アイヌ文化博物館の森岡健治前館長らによって進められた。その際、加藤教授から、ロンドンでアイヌ文化を正しく発信するには、アイヌ古式舞踊やアイヌ語、口承文芸、アイヌ工芸、アイヌ料理など、トータルで文化を発信できる土地柄として平取町が推薦された。

事業の展開にあたって、平取町の目的は、平成31年4月に成立したアイヌ施策推進法に基づき、地域のアイヌ文化を世界発信して住民の誇りにつなげること、二風谷の地域振興に寄与することであった。

その結果、事前打ち合わせと展覧会に関わる地域住民の派遣を合わせて、総勢68名が英国へ行くという大規模な事業となった。約5か月間の展示期間中、163,195人の方々が来場した。オープン前日の内覧会は213人の招待者で賑わい、在英国日本大使館の林肇大使にもご出席いただいた。

2. 展覧会及び関連事業について

展覧会の内容は、主に平取町のアイヌ文化継承の今日に焦点を当て、アイヌ工芸品やアイヌ語、英国と平取の歴史的な関わり等を含めた構成であった。

特に、メイン展示のひとつである平取町民のインタビュー映像は、方形の展示室の壁面に合計12か所

のテレビモニターを設置し順番に視聴できるようになっている。アイヌの民具や歴史事象の展示だけではなく、地域住民の今を英国の方々にはしっかり見てもらえるように意図された映像展示である。

展覧会の関連事業として、11月～3月にかけて平取アイヌ文化保存会、平取町二風谷アイヌ語教室、二風谷民芸組合の方々を英国に派遣し、現地でアイヌ古式舞踊やアイヌ料理、アイヌ語、アイヌ口承文芸、アイヌ工芸の披露、ワークショップ等を行った。Ainu Stories 展関連の様々な事業のうち、平取町民が講師を担ったのは33事業、うち5事業でライブ配信が行われた。会場とライブ配信を合わせて4,856人が受講し、その他にサイモン氏のギャラリートツアーや、平取町のドキュメンタリー映画「Ainu | ひと」の上映も行われた。

3. 1910年の日英博覧会とB・ピウスツキ

一世紀以上前に日英博覧会へ派遣された沙流アイヌ（二風谷村7名、平取村1名、門別村2名）のことも、しっかり語り継いでいきたい。日英博覧会は、ロンドンで1910年5月14日～10月29日の約5か月間、2023年のAinu Stories 展と同程度の期間に行われた。

博覧会の開幕から2か月半後ごろに、プロニスワフ・ピウスツキがロンドンへ出向きアイヌ一行と面会を果たし、その後、10月29日にアイヌ一行が帰国するまでに50以上の物語を記録した。なお、ピウスツキは1903年の夏に約1週間、平取コタンを訪問し地域の暮らしや文化を調査しており、その前後に暮らした樺

太アイヌとの交流も含めた経験が、ピウスツキをロンドンに向かわせた動機と考えられる。

博覧会でのアイヌ一行とピウスツキとの交流の一端を、ピウスツキが書き残している。「私と会話を交わしたことで、彼らは自分たちの尊厳を同じ人類の一員という位置にまで高めることができたとして、深く感謝の意を表していた」という一文は、ピウスツキとアイヌ一行の信頼関係を表すエピソードともいえる。

また、アイヌ一行がロンドンを離れて日本へ帰国する際に残した感謝のメッセージは、ピウスツキが一行から聞きとって新聞社にもちこみ、掲載されたという。そこでは「…この善意の婦人の住む豊饒な国について、それを子々孫々まで私たちの子孫に伝え、語り継がせるつもりでいます」と述べられている。地域で語り継がれた博覧会の逸話は、後の昭和58年に出版された『エカシとフチ』にも掲載され、貴重な記録として今日まで残されている。

4. 一世紀を超えたアイヌの想いをつないでいく

ロンドンでアイヌの文化を紹介するイベントや展示は過去何度も行われているが、沙流アイヌの文化に特化して長期間行われた催しは、日英博覧会と JHL の AINU Stories 展に代表される。

ピウスツキは日英博覧会のアイヌ一行に大きな誇りを与えた。そして113年を経た2023年に総勢68名もの関係者が英国に行き、沙流のアイヌ文化を発信した。

今後、JHL と北海道大学、平取町、平取町民等が協働した AINU Stories 展を、しっかりと語り継いでいくことが一層大事になる。合計68名もの関係者が英国に行き交流した記録が、数十年後には貴重な歴史資料になっていくことが期待される。

一世紀を超え、様々な縁でつながってきた“アイヌの物語”をこれからも大事に伝えていきたい。

(おさだ・よしひろ、本会会員)

◆アンケートの感想より（アンケート 15 枚、質問用紙 1 枚）

<p>素敵な映画をみせていただき感謝です。心が豊かな人達は表情もお話も本当にあたたかい。せっかちに、不満やねたみの中で生活してきた自分を考えさせられました。今まで行ってきた差別を思うとアイヌと関わることがこわかったのですが、後半の交流をみて、過ちを認め、関わりを持ってみたいと思いました。(50代)</p>	<p>ドキュメンタリーの映像が大変貴重で、繊維のとり方や、あく抜きから、さまざまな作業工程など、自然と共生して暮らしていたアイヌの文化を知ることができ、嬉しく思います。森のボランティアなどさせていただいたり、植物調査にかかわっているので、大変興味深かったです。アイヌの着物にもいつか挑戦したいです。(60代)</p>
<p>長田さんの講演:イギリスで“ジャパン・ハウス ロンドン”によるアイヌ関連の展示会があったことも、1910年の日英博覧会も知りませんでしたので、大変興味深く聴くことが出来ました。可能でしたら、スライドを紙資料として配布して頂ければ、更に良いと思いました。(60代)</p>	<p>「遠慮とともに、ではありますが…」いつも神様への敬意を込めてうたい、普通の暮らしを望みながら強い思いを捨てずに生きてきた“人たち”。普通の暮らしが出来ることが平和で幸せであることの、努力の魂の「先人たち」に敬意の気持ちを、改めて深く持ちました。(50代)</p>
<p>なくした母語を再獲得していくこと、自己確認、誇り…となっていくこと。自然は働きかけるものではなく、いただくものという認識。和人が侵略するなかで、どう生計をたててきたのか、生計をかえられたのか、その中で、失いかけたものを再獲得していく営み…(70代)</p>	<p>北海道人です。母の実家(みやげもの屋、登別温泉)のとなりにチセがあり、いれずみを入れたおばあさんがおりました。また、おじが白老のアイヌの人と交流があったようです。このような催し、道民向けに開催すべきだと思いました。ありがとうございます。(70代)</p>
<p>川奈野一信さんが山の木を切るときの話で「皮をもらうんで、山の神さんによるしく頼む」と言ってお祈りをささげるシーンが印象的でした。また、「強制移住は民族の共通の問題」と鍋澤さんが言っていたことも印象的でした。また、言語学習、残っているテープや、記憶のある人たちでの勉強会、大変なことだったと思いますが、とてもとても大切な取り組みだと感じました。(30代)</p>	<p>ジャパン・ハウス ロンドンでの5か年にも及ぶ取り組み全て知りませんでした。100年にもわたるアイヌ文化への関心〜ピウスツキという歴史の中の人物が今によみがえったようで感銘をうけました。ありがとうございました。『Ainu ひと』今を生きる AINU の人々の姿を垣間見させて戴きました。子供たちに伝わっていくのも嬉しいことでした。(70代)</p>
<p>JHL での展示では、現地の人々がアイヌへの関心、少数民族の言語を残すという面でも関心を持っていたということを知った。また、『Ainu ひと』の上映では、バックグラウンドは違えど。同じ二風谷という地でアイヌ文化の発信を続ける4人、また、それを通じてアイヌ文化の継承をする人々の思いを知ることができる良い作品だったと思いました。(20代)</p>	<p>本日は貴重なお話、映画を拝見する事ができ、とても勉強になりました。1910年のロンドン日英博覧会から113年という長い年月を経て、また日本のアイヌ文化を世界の人々に知ってもらえる機会ができた事、とても重要で意味のある展覧会だったのだと思います。今を生きているアイヌを、私達の世代ももっと学んでいきたいです。(20代)</p>

コサックの国・ウクライナは屈しない 先川 信一郎



今年3月中旬から1か月間ポーランド経由でウクライナを訪れた。そして、この戦争の目的が「文化の破壊」だと実感した。ロシア軍は民間人を殺戮し、略奪し、住み慣れた家や農地を燃やすだけではない。人々を恐怖のどん底に突き落とし、ロシア帝国やソビエト連邦時代のように属国化を狙っていた。つまり、ウクライナ人のアイデンティティを消し去ろうというのがこの戦争の本質だ。だが自由の民・コサックの伝統を受け継ぐ人々は勇敢だった。

「虎が庭にやって来た」

——ワルシャワ近代美術館で開催中のウクライナの画家「マリア・プリマチェンコ展」はこう名付けられた。これは戦争の実相をうまく表わしている。平和に暮らしていたウクライナ人からすればそんな感覚だろう。

日本人の多くが「非戦」を訴えているが、目の前で家族を殺されたらどうするのか。ロシアは国際法を犯し、核の恫喝を繰り返し、プーチン大統領には国際刑事裁判所(ICC)から逮捕状が出ている。ウクライナの子どもたちを「ロシア化」するため、2万人以上を拉致したのは、戦争犯罪以外のなにものでもない。

市民のソフトパワーを知ろうと、私はクラクフから列車でウクライナ西部のリヴィウに向かった。最初に取材したのは国民的詩人でPEN ウクライナ副会長のオスタップ・スリヴィンスキーさん(45)=上写真=だ。詩人は市民や時代の声を敏感に伝える。



「われわれには戦うしか選択肢がない。戦いをやめれば全てを失う。領土の20%だけではなく主権や安全保障まで失う。だから武器を捨てて和平交渉を始めようとは言えない」

ホロドモール(大飢饉)やスターリンによる大粛清を知るウクライナ人にはソ連時代の恐怖の記憶がある。これは日ソ中立条約の破棄やシベリア抑留を知る日本人にもわかる。

次に首都キーウで会った気鋭の現代アーティスト、ニキータ・カダンさん(42)=下写真=は、ソ連時代と向き合いながら、戦争の不条理さと怒りを作品に込めていた。彼は芸術文化の最高賞であるタラス・シェフチェンコ国家賞を受賞している。



驚いたのは、カダンさんが開戦直後、キーウの地下シェルターで1か月

間寝泊まりしながら美術展を開いたことだ。彼のアトリエにはギリシア神話の英雄アガメムノンとゴミ袋の作品があったので、何の暗喩か尋ねると、「ウクライナ軍はロシア兵の遺体を引き取るよう敵に伝えた。すると送られてきたのは黒いゴミ袋だった。ゴミ袋は死んだ侵略者の象徴。アガメムノンは植民地化して支配しようとする戦士の王だ」と解説してくれた。

音楽は私の武器

では、音楽家の受け止め方はどうか。国立フィルハーモニー交響楽団の音楽監督・指揮者を務めるミコラ・ジャジューラさん(62)=下写真=は「音楽は私の武器だ」と明快だ。そのうえで「毎日、きょうが最後だと思って演奏している」と述べ、戦時下での覚悟を語った。ジャジューラさんは昨年12月、キタラでも演奏している。私はキーウの国立歌劇場で彼が指揮するプッチーニのオペラ「トスカ」を鑑賞したが、1300の席は満員だった。



数日後、国際的なベストセラー『ペンギンの憂鬱』(1996年)の著者として知られるアンドレイ・クルコフさん(63)を訪ねた。「私たちの文化は人々の尊厳を守る働きをする。それは人間の魂を守る『目に見えない鎧』である」と、文化の重要性を指摘した。



帰路、クラクフのヤギウエオ大学東スラブ研究所で、プシェミスワフ・トマネク副所長=左写真中=にも話を聞くことができた。「プーチンの狙いはロシア帝国、ソ連邦を再現することだ。ウクライナを破壊し植民地化し、ロシア化して人々を隷属させようとしている。侵略された側は戦うしか選択肢がない」と、ウクライナの人々と同じ意見だった。

帰国後、ルポを『週刊金曜日』に連載したが、読者の中には「マイダン革命は民族派による自作自演」「ドンバスの停戦を巡るミンスク合意を破ったのはウクライナだ」「ウクライナが挑発したのが悪い。降伏すれば戦争は終わる」と主張する人たちがいた。話とし

では面白いが、ファクトではない。

中には「オタワ大学のイヴァン・カチャノフスキーの論文を読め」という人までいた。トマネク副所長らに確認すると、親ロシア派のカチャノフスキーは、反

証があるにもかかわらず、捏造論文を拡散するところでもない陰謀論者だという。ロシアのプロパガンダにはくれぐれも気を付けたい。

(さきかわ・しんいちろう、ジャーナリスト、本会会員)

グラジナ・バツェヴィチのピアノ・ソナタ第1番 ～日本初演へ～

徳田 貴子

昨年『現代ポーランド音楽の100年～シマノフスキからペンデレツキまで』（グヴィズダランカ著）が出版され、POLE112号で高橋健一郎先生が紹介されたので、ショパン以降の現代ポーランド音楽に興味を持った方も増えたことだろう。



ポーランド音楽におけるファーストレディ

この本の中では、女性作曲家として成功したグラジナ・バツェヴィチ (Grażyna Bacewicz, 1909～69) がしばしば取り上げられている。ワルシャワの国立高等音楽学校(現ショパン音楽大学)教授にまで上り詰め、ポーランド作曲家連合(Polish Composers' Union)の副会長を務め「ポーランド音楽におけるファーストレディ」と称された彼女の作品に興味を持った方もいらっしゃるかもしれない。

彼女のピアノ作品としては、1953年に作曲されたピアノ・ソナタ第2番が有名である。この作品は不安定な調性の中でも明確に主張がある第1楽章、ポーランド民謡を思い起こさせる第2楽章、ポーランドの踊り、オベレックに乗せて駆け抜ける第3楽章からなる。常に不安定な雰囲気纏っているこの曲は、当時のポーランド音楽の世相を反映しているといえよう。1949～53年まで作曲家たちはソ連の提唱する「社会主義リアリズム」の教条のもと、より大衆にわかりやすくポーランド的な音楽を作曲するよう強制されていた。この社会主義リアリズムの統制を意識しつつも、第2番では明らかに反抗した表現が展開されている。彼女自身の言葉を借りれば、石に「彫刻」するかのよう、1音たりとも無駄なく意味を持った本作品は、現在、世界的にも注目が高まっている。

幻のピアノ・ソナタ第1番

一方、ソナタ第1番はあまり世に知られていない。というより、第1番は2022年まで未出版で、幻の作品だった。作曲された1949年から72年の時を経て、一昨年ようやく世に送り出されたのである。第1番は、統制を超えてより自由に表現しようとした第2番とは対照的で、伝統的な形式に則って作曲されており、調性もより明確で親しみやすい。ポーランドの踊りのリズムやポーランドらしい音程を含む旋律が大きなスケールで表現され、大衆にわかりやす

い音楽になっている。1949年は社会主義リアリズムの教条が作曲家に課された最初の年なので、バツェヴィチもそれを意識したのだろう。

けれども、第1番の表現がそれだけに尽きるとはいえない。第2番において際立つことになる「モーターのような」書法や「遠近感を感じさせる」書法は第1番でも用いられており、彼女の個性が感じられる。また、特徴的な書法を用いて社会主義リアリズムに歯向かっていくような主張は、実は第1番でもなされている。だが、その主張は長続きせず、結果的に伝統的な形式に収まっている。その過程は悔しさを感じさせ、結果としてこの曲にしか存在しない美しさを作り出している。

私は大学院博士課程で、学位論文のテーマとしてバツェヴィチの作品を研究した。その過程でソナタ第1番の原稿がポーランド国立図書館に眠っているらしいことを知り、幻の第1番の存在を知った。楽譜のデータを入手し実際に自分で弾いてみて、第2番とは違う美しさやスケルツォ的なキャラクターがある第1番に魅せられた。

日本初演へ



このたび、紆余曲折を経て第1番が出版され、公的に演奏できるようになったので、このソナタ第1番を、第2番とともに10月25日の札幌市民劇場公演にて演奏する予定である。第1番は日本初演となる。

= G. Bacewicz = 写真家 Andrzej Zborski,
ポーランド作曲家連合コレクションより

多くの方々に、幻だった作品をぜひ聞いていただき、困難な時代にも個性を持って創作活動を続けた作曲家がいたことを知っていただきたい。

次号では、グラジナ・バツェヴィチの生涯を辿る予定である。(とくだ・たかこ、ピアニスト、本会会員)



日本に於けるショパンの受容について（4・完）

川染 雅嗣

都はるみ〈北の宿から〉

昭和を代表する演歌歌手・都はるみの大ヒット曲に〈北の宿から〉がある。作詞は阿久悠、作曲は小林亜星である。この曲は発売当初からショパンの〈ピアノ協奏曲第1番 Op.11〉第1楽章の副主題との類似が指摘されていた。しかし、小林亜星本人は否定している。ショパンのメロディーの特徴は5音音階でもないのに、そう聴こえるところにある。譜例をご覧頂きたい。開始音から4つ目のシから急に完全4度跳躍してミ音に移るところに、どうやら日本人の琴線に訴えるものがあるようだ。この旋律を〈北の宿から〉と比べてみると、開始から9番目の音まで全く同じ音程で推移して行くのがわかる。ここにも完全4度の上行がある。これではパクリと疑われても仕方がないだろう。しかしこの曲は140万枚超の売り上げを記録し、紅白歌合戦でも2度歌われている。

このような進行はチャイコフスキーの〈舟歌〉にも見られる。冒頭の旋律がレ音から始まりゆっくり順次進行して1オクターブ上がったところから急に完全4度跳躍してソに移る。この進行に心が揺さぶられる人は少なくないだろう。実はこの進行、スラブ系の音楽によく見られるという説もある。

譜例1 〈ショパン：ピアノ協奏曲第1番第1楽章〉



譜例2 〈小林亜星：北の宿から〉



中田喜直 〈雪の降る町を〉

次の例を挙げてみよう。中田喜直の〈雪の降る町を〉である。この作品は以前からショパンの幻想曲 Op.49の冒頭部分との類似がささやかれていた。少なくとも筆者が学生時代には学生間でも話題となっていた。

譜例3 〈ショパン：幻想曲 Op.49〉



譜例4 〈中田喜直：雪の降る町を〉



如何であろうか。ここにも完全4度の上行が見られる。譜例3の3小節目、3拍目から4拍目にかけてのド→ファである。

筆者はポーランドから帰国してまもない頃、中田喜直先生にお目にかかったことがある。友人二人が中田作品のみでリサイタルを開き、その伴奏を仰せつかった。その流れで中田先生のレッスンを受けに行ったのである。その時、〈雪の降る町を〉はショパンの旋律を借用したものかと訊いてみたかったがやめた。喉まで出かかったのだがその勇氣はなかった。しかし先生は大変なショパン好きであることがその時わかったのである。そして私がポーランド留学経験者でショパン・コンクールにも出場経験があるとわかると、ショパンの様々な作品を自らお弾きになり、色々な解説を伺うことができた。その中でふと漏らしたこんな言葉があった。「いいメロディーでしょう。つい使いたくなるんですよ」

最後に音程について触れておこう。古来より、ある音程の進行がある概念を表していると言われてきた。例えば、完全5度又はオクターブの上行は「復活」や「栄光」、下行する半音階は「キリストの受難」、同一音の反復は「神の掟」や「仮借なき必然性」というわけである。また、長6度音程の上行は「憧れ」や「幸福感」を、2度音程の下行は〈マンハイムのため息〉とも呼ばれ、「悲しみ」や「寂しさ」を表すとされている。では今回話題とした完全4度音程の上行はどうだろうか。これは「優しさ」や「懐かしさ」と言われている。但し、これは完全4度の場合で、これが半音広がり増4度となると、途端に「苦悩」や「墮落」を表すのだ。たかが半音されど半音である。(完) (かわそめ・まさし、昭和音楽大学特任教授、本会会員)

松本照男さんへの謝意・お別れのご挨拶 *2024年4月18日逝去

ポーランドへ渡り、日本とポーランドの歴史的な橋渡しの仕事をされました

塚本 智宏

松本さん！ お会いして、直にお伝えすべきお礼の言葉をたくさん抱えたまま、こういった形で謝意や思い出を述べることになったことをお許しください。

私のコルチャック研究や関連する“子どもの権利”ポーランドツアー企画の実現、また日本でのコルチャック関係の講演会や研究会へのご協力、さらに本協会が関わったピウスツキやアイヌ関係のイベントに関すること、外務大臣表彰=右写真=など思い出すことは山ほどありますが、何よりも、現地において、確かな同時通訳の仕事と現地調査の協力などで、本当にお世話になりました。



私が本格的にコルチャック研究に入り込んだのは2000年代からですが、勤務先の大学の職員が関連する研究書を探す作業の中でワルシャワの松本照男さんに行き着き、紹介されたのが最初でした。科研短期出張で三年連続ポーランドを訪れることになって、毎回最初から最後まで松本さんにお世話になりました。あわせて当時ワルシャワ大学の著名なコルチャック研究者である W・タイス教授夫妻にも合わせていただき、驚きました。

ポーランドのシベリア孤児救済

何とお二人は共同のテーマで(日本側からとポーランド側から) 史実の発掘をめざして、日本・ポーランドの友好関係のひとつのきっかけともなった第一次世界大戦後のポーランド人シベリア孤児救済に関わる研究やその後の孤児の交流などをバックアップしていたのです。

松本さん(と奥様、故ハリーナさん)とは、私のポーランド留学前にたまたま来日された札幌市内でお会いしたことを思い出します。松本さんは国費留学生として訪ポ以来50年以上、ワルシャワでジャーナリストとして活躍されましたが(『戦争と占領』岩波ブックレット、1989 など)、日本との関係では“たいしたことはできていない”と謙遜されていましたが、後でハリーナさんが「そんなことはない、テルオはワルシャワでとても素晴らしいことをしている…」と、尊敬する夫のことを日本語で話しておられました。

その頃の私は松本さんらがたいへんな努力で過去のシベリア孤児の方たちを自宅などに招いて交流を実現していたことは全く知りませんでした(松本

照男・ブィェスワフ・タイス著『シベリア孤児1921～1922年 ポーランド児童への日本の援助』ワルシャワ、2018)。

最近は敦賀に「人道の港敦賀ムゼウム」が開設され、この事実を日本側から探究・検証する作業もはじまり、その博物館の開館に合わせてワルシャワからお二人が招かれて来日したのが数年前です。今年六月にも、関連する日本側の記念イベントがあり、当時子どもの救援・支援に関わった社会福祉法人「福田会」の企画(「ポーランド孤児救済100年」東京・渋谷区=右画像=)の記念式典には松本さんも来日予定でしたが、残念ながらタイスさんお一人での来日となりました。



松本さんは、私のポーランド滞在中、車を飛ばして何度もトレブリンカに同行してくださり、時間を見つけては、ポーランドを何も知らない私のため、市内の戦跡、地下水道、近世ポーランドの歴史を体現する場所、宮殿、遠くクラクフにいた旧姓鈴木亜里さんとともに“ショパンの家”を訪れ、タイス夫妻と連れ立って遠くトルンの街への冬旅もありました。

が、何といっても中華風の店で鍋を食べるのが毎回滞在中の最高の晚餐で、そこでは日本酒の熱燗と一緒に飲みました。ポーランドへは必ず四合瓶をおみやげにトランクに入れていくのが松本さんとの“契約”で、満面の笑みでおちょこを口にされていたのを思い出します

コルチャック研究

最後に、これまでの私たちのコルチャック研究にお付き合いいただいたことに、改めて心からお礼申し上げます。ポーランド語版のコルチャック全集(ようやく完結)が日本国内に揃うようになったのも、松本さんのご協力によるものです。また、お宅で下宿をしながら、研究者となり単著を出すまでになった若い研究者の仕事も、いうまでもなく松本さんのお力添えによるものです。

コロナ禍もあけましたので、近いうちにまたポーランドにお酒をもってご挨拶とお礼に伺いたいと思っておりました。遠くワルシャワの空から我々を見守ってください。

(つかもと・ちひろ、日本ヤヌシュ・コルチャック協会代表理事、本会副会長、札幌国際大学特任教授)

松本照男氏の訃報に接して 尾形 芳秀

ポーランドでジャーナリストとして長く活躍された松本照男氏が4月18日に亡くなりました。氏は長年日本とポーランドの友好に努められ、その功績を称えて、2016年には在ポーランド日本大使館で外務大臣表彰を受けられました。

私と松本氏のご縁は、氏が「日本がシベリア出兵時にポーランド救済委員会からの要請により、シベリアのポーランド人孤児を救済したこと」を後世に伝えようとしていることを直接伺ったのが始まりでした。



松本照男氏, 2018.5
ワルシャワ旧市街にて
撮影 尾形芳秀

樺太残留ポーランド人の軌跡

一方、私は1905年の日露戦争後に樺太に残留したポーランド人に関心がありました。

日露戦争最後の戦いが樺太であった時、この島にそれまであったロシアの地獄のような流刑地は解体され、流刑囚は解放されました。その中にはロシア人のほか、ポーランドからの人々もいました。彼らは解放されて直ぐにも母国に帰ることができたのですが、母国は未だロシアの統治下にあり、母国の独立まで残留させてほしいと、戦闘中にもかかわらず願い出たのです。それは彼らのいう「ワルシャワ集落」(ノヴォ・アレクサンドロフスク、小沼)の人々でした。日本軍はその要請を受け入れ、約60名の残留が認められます。ロシア人の大半は沿海州に強制送還されました。

残留を希望したポーランド人たちは、サハリン島時代の20年間、そして樺太時代の40年間を日本人と共に過ごしました。樺太時代、彼らの子供たちは私たちと共に同じ学校で学び、中にはハルビン

のポーランド人学校に特待生として転校し医師となった人もおりました。

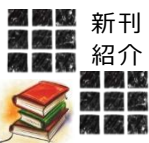
日本の敗戦により彼らとは長い別離があり、消息は不明でしたが、「ピウツキの蠟管」の報道があった1980年代から彼らの消息を探して再会し、B・ピウツキとの交流についての記憶を照会しました。その結果、1902年頃、ピウツキが極東からサハリン島南部のアイヌ民族調査に来た頃から彼らの支援(警備、輸送、宿泊、食料等)があったことが分かりました。サハリン島時代のポーランド人の支援無くしてピウツキの研究はあり得なかったとみられます。

この話を聞いた松本氏から「シベリア孤児救済」と相通じるテーマなので、ぜひ後世に遺してほしい」とのお誘いを受けました。「そのポーランド語版は私が引き受ける」ともいってくださいました。しかし、多くの資料の解読と執筆に手間取り、それが間に合わなかったことは本当に悔やまれます。

これまでのご厚誼に感謝するとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

(おがた・よしひで、樺太郷土史研究会及び本会会員)

霜田千代麿さんの俳句を読んで 嵩 文彦



新刊
紹介

樹木は何千年生きてきても、もう生きるのに疲れはてた、もういつ終わってもいい、とは言いません。樹木は黙って枯れるまで生きてゆくだけです。

人は意識や言葉という余分なものを持ってしまいました。それで、詩を書いたり俳句を作ったりもします。「信じる」ことも人しかできない行為です。



霜田千代麿さんは『俳句の宙 2023 精選アンソロジー』(本阿弥書店)を残して逝かれました。十五人の作家の百句がそれぞれ掲載されて1冊にまとめられたものです。

私は五・七・五の定型を守るだけで句を作っています。その私に伝統俳句作家霜田千代麿さんの俳句を読む機会が与えられました。

雪と記し一日をはる日記かな

一日止むことなく雪が降っておりました。一日何も積極的にすることもなく過ごしました。

明治維新以来、立身出世せよ、克己勉励せよと

言われてきたことが、戦前・戦中派の頭にはこびりついています。無為に過ごすことは、決して悪いことではありません。新しいものを生むためには、休養を取ってエネルギーを蓄える必要があります。今の時代、頑張りすぎで鬱病になり、自ら命を絶つ人が出ます。雪のふる静けさをゆるやかに過ごし、日記に「雪」とだけ記すのは、とてもいいことです。

子規居士の目玉おそろし藤の花

この句は「瓶(かめ)にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり」が念頭に置かれています。腰椎カリエスで寝たきりの子規は死が近づ

いていても眼光鋭く、当たり前のことを当たり前と、見過ごすことなく観察いたしました。当たり前ですが、当たり前でいられることは、なんと素晴らしい僥倖でないでしょうか。一個の爆弾も、大地震も、たちまち私たちの平安を壊してしまいます。死の迫る病者にとって、なによりも平安は大切なものです。

畑、蛙、ボウフラと我慈雨を待つ

ボウフラはやがて蚊になって人畜に害を与えます。それが、畑という食料生産の場と、「古池や蛙飛び込む…」の愛らしい蛙と「我」が一緒に並べられているところがこの句の目玉でした。私たちは「万物の霊長」として、利害で生き物の生命と奪を決めています。水が命の「我」もそれらと一緒に、大地への慈雨を希求しています。生物の命の平等感が主眼の句ですが、ユーモアがあります。

物忘れ梅つこ散ればほけが咲く

「ぼけ」は「木瓜」と「呆け」を掛けていますね。認知症は人生50年の時代には見られないものでした。長

寿が当たり前の時代です。ユーモアでもって、自分の老化と向き合えるように、日頃からの準備が必要です。「物忘れ」は高齢になれば、誰にでも見られることで、必ずしも認知症の前兆ではありませんけれど。

蟻うごき農夫もうごく日向かな

「蟻動き」と漢字を使つては絶対いけないところ。す。「うごき」とすると小さな蟻の懸命な動きが、そして年食った農夫の広大な大地に取り付いて働いている姿がよく表われてきます。「日向」としたのは霜田さんのやさしさの現われです。「日向」はやわらかな言葉です。「日差し」はいかにも強い日光を思わせ、霜田さんはそれを避けたのでしょう。

霜田千代磨さんに、こんな句もありました。「うらめしや子持ち鯛(はたはた)口あけて」動物はほかの生き物の命を貰って生きてゆかねばなりません。それを「業」としてとらえるのは仏教になじんだ私たちに特徴的なことのように思います。

良い機会に恵まれました。深謝いたします。

(だけ・ふみひこ、現代俳句作家・詩人、本会会員)

北海道医療大学とルブリン国立医科大学の学術交流

2024年6月中旬、ルブリン国立医科大学との学術交流の一環としてマリア・ミエルニク=ブラシュチャク教授=写真右=が北海道医療大学(当別町、札幌市)を訪れました。同教授は小児歯科を専門としています。訪問時には当別とあいの里のキャンパスを訪れ、日本の歯科治療に関する現状を把握するとともに、ポーランドの小児歯科に関するセミナーを行いました。滞在中の休日には、支笏湖や積丹半島にも足を運び、かつてないほどの好天に恵まれたこともあり、北海道の自然の美しさに魅了されていました。

本年9月には、北海道医療大学歯学部 of 古市保志学部長がルブリンを訪問する予定です。また、心理科学部分野での協力も期待されており、今後の両大学間の関係発展が楽しみです。



(シルヴィア・オレーヤージュ、佐藤圭史
Sylwia Olejarz, Sato Keiji, 北海道医療大学)

【5月よりつづく】 《第112回例会》『Ainu | ひと』上映 ◆アンケートの感想より

<p>日英での報告で、130年の時をへて現代の人が英国を訪れた話を聴くことができ良かった。また、現代も平取町では、文化が守られているだけではなく、復活して、現代も生きて発信されているのはどうしてかを映画から知る事ができてとても良かった。(50代)</p>	<p>平取の春夏秋冬を通し、そこに累々と根づいて来たそれぞれのAinu ひとたちの生活、祈りが画面の中から感じられ、改めて文化や民族を継承していくことの大切さや難しさを理解させて頂くことが出来た作品だと思いました。より多くの人たちにこの作品を見てもらうことにより、アイヌ文化を理解する機会になるものと信じます。良い機会をありがとうございました。</p>
<p>ドキュメンタリーは、なかなかの力作。アイヌ文化の中核となる「アイヌ語」を伝えることが、いかに大切か、再認識しました。先住民の権利について国際的な連帯をもっと強めてほしい。(70代)</p>	<p>映画が終わった後、彼らの自然との共生、他者との共生という考えに共感と癒やしを感じました。美しかったです。祖先から受け継がれてきた自然(神)に対する敬いの心と深い知識をもって自らも自然の一部として生きていっしやる。アイヌ文化を次代に引き継ぐことは簡単ではありませんが、日本の重要な文化として引き継ぐことが必要だと思いました。しかしアイヌの方々に対する差別は過去のことではなく、現在進行形の問題です。それで言うと、4人の登場人物のなかでお若い方の経験に基づく発言が最も重要で、そのような経験をする事のない社会を創ることがアイヌも含めた私たち全員の責任だと考えます。(60代)</p>



♪〈後援〉川染雅嗣ピアノリサイタル in アルテピアッツァ美唄 Vol.5～石のそばに佇む、安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄アートスペース(美唄市落合町深町)、2024年10月5日(土)14:00～、共演: 栃原享子、入場料: 一般2,000円 中学生以下500円、問合せ: 090-2076-0487 (栃原)

今秋の後援事業

♪〈後援〉徳田貴子ピアノリサイタル～グラジナ・バツェヴィチの系譜(ピアノ・ソナタ第1番日本初演)、札幌(第1594回札幌市民劇場): ふきのとうホール、10月25日(金)19:00～/ 恵庭: 夢創館、10月27日(日)13:30～、入場料: 一般2,000円、小中学生1,000円、未就学児 無料、チケット取扱い: 道新プレイガイド、市民交流プラザチケットセンター Tel 0570-00-3871、問合せ: tokudatakako@gmail.com



会員動向 (2024.5～7) 入会: 亀山範行 (敬称略)

ご寄付 (2024.5～7) 深謝! (1口千円) (3) 田村和子 (1) 北口久雄、本間公平

年会費 (2024.9～2025.8) 納入のお願い 新年度の会費納入をよろしくお願ひします。
 年会費: 一般3,000円、学生1,500円 また、維持会費としてご寄付(1口千円: 任意)も承ります
 ※ご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください

- ◆ゆうちょ銀行振替口座【記号】02740 5【番号】19735【加入者名】北海道ポーランド文化協会
 (他銀行から送金の場合)店番(279)預金種目(当座)店名(二七九[ニナナキユウ]店)口座番号(0019735)
- ◇北洋銀行(本店営業部)普通預金口座【店番号】028【口座番号】0605084【名義】ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ
 ※「北洋銀行アプリ」を利用すれば、北洋銀行口座間の送金手数料は無料です
 ※遠方の方はご寄付(年千円)で会誌 POLE の定期読者になることもできます。事務局にお問合せください

寄稿募集 本誌への寄稿を募集します。〆切は毎年3月末/7月末/11月末、分量は1000～1500字程度、テーマ、ジャンルは自由。詳細は下記事務局の電話・メールへお問合せください。

POLE113 目次

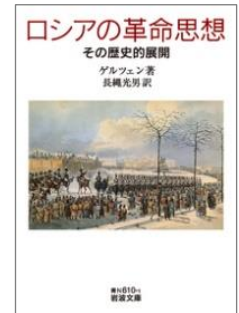
《第38回定例総会&懇親会》を開催します..... 1
 報告《第111回例会》講演&ビデオ上映「カティンの森事件とモンゴル・シベリア抑留」(園部真幸、井手裕彦、建部奈津子)..... 2
 報告《第112回例会》講演と報告とドキュメンタリー映画『Ainu | ひと』上映(熊谷敬子、長田佳宏)..... 4
 コサックの国・ウクライナは屈しない(先川信一郎)..... 6
 グラジナ・バツェヴィチのピアノ・ソナタ第1番～日本初演へ(徳田貴子)..... 7
 日本に於けるショパンの受容について(4・完)(川染雅嗣)..... 8
 松本照男氏追悼(塚本智宏、尾形芳秀)..... 9
 〈新刊紹介〉『俳句の宙 2023 精選アンソロジー』霜田千代磨さんの俳句を読んで(嵩文彦)..... 10
 北海道医療大学とルブリン国立医科大学の学術交流(シルヴィア・オレーヤージュ、佐藤圭史)..... 11
 〈新刊紹介〉『ロシアの革命思想～その歴史的展開』(長屋のり子、松田潤)..... (別紙)13

	発行 北海道ポーランド文化協会	ポーレ編集委員会
	〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方 TEL・FAX 011-556-8834, hokkaidopolandca@gmail.com	安藤厚/池田光良
東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付	TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058	氏間多伊子/熊谷敬子



ロシアの革命思想 ～その歴史的展開～

ゲルツェン(著) 長縄光男(訳) 岩波文庫 2024.3



名著、ゲルツェンの『ロシアの革命思想～その歴史的展開』が岩波文庫からこの3月に刊行された。ロシアの文化史、文学史、思想史に関する先駆的、古典的名著として評価が高い。1851年に書かれ、本邦初訳が同じ岩波から1世紀後の1950年に出版され(『ロシアにおける革命思想の発達について』金子幸彦訳)改訳版14刷まで版を重ねたが、その後途絶えていた。その情熱渴望が込められた新訳復刊である。

良書はいつも予言を孕む

訳者長縄光男は掉尾の卓越の解説の中でこう語る。「ゲルツェンの評価の数々は、今日に至るも色褪せていない。それどころか、その色は、この数年来、むしろ鮮やかさを一段と増しているようにすら見えるのである」(247頁)深く深く訳者に首肯する。

本書は「我らが友ミハイル・バクーニンに* / 〈ポーランド民主委員会の私の友人たちは私の著作『ロシアの革命思想～その歴史的展開』の再刊を強く勧めてくれている。私はこの事実には極めて大きな意義があると考え。というのも、この本の公刊は革命ポーランドとロシアの革命家たちとの友好的同盟の公然たる証しとなるであろうからだ〉」(9頁)という揺るがない扉書きから始まる。

*初出1853年版。当時バクーニン*はロシア政府に捕らえられ、生還する望みはないと思われていた。
(訳注)[*カール・マルクス、ジョゼフ・プルドンに強く影響を与えた無政府主義の革命家―長屋]

本書には19世紀に跋扈した私たちの知るあらゆる文化人、思想家、文学者が多彩に登場する。

ポーランドとの関係の著述は他の何にも増して濃密長大だ。33頁にこんな記述がある。

「全ての国の人びとがロシアに対して断固として立ち上がるためには、ポーランドの苛酷な戦いだけが足りなかった。ポーランドの革命の高潔な、しかし不幸な残党が、ヨーロッパ全土をさまよいながら、恐ろしい残忍な勝利者たちに関する情報を広めていた時、ロシアを呪う大きな声があらゆる所から、あらゆる言語で鳴り響いた。諸国民の怒りは正当であった…。

自分たちの弱さと無力に顔を赤らめつつ、われわれはわが国の政府がたった今われわれの手によ

って為したことを理解し、われわれの心は血の出るような苦痛に萎え、目からは苦い涙が流れ出た。

ポーランド人と顔を合わせる時など、いつでも、われわれは目を挙げる勇気を持たなかった」

長い引用になるが、この辺りのゲルツェンの文章は感情を率直直截に吐露溢させ、稀有な詩のように美しい。勿論、訳者の精緻にして柔軟優美な、量り知れない力量の訳文に依るところも大だが、全文、読み難いところが一箇所とてない。すべらかに胸におちて、その告発に啓蒙される。

闘いは続く

「ロシアの農民は多くのことに耐え、多くのことで苦しんできた。彼らの苦しみは軽減することなく今なお続いている」(244頁)

最後の章のゲルツェンのこの文章は重い。「闘いは終わっていない。闘いは続いているのだ」(229頁)

この一冊をプーチンに捧げたい。彼に精神の清らかな慰謝を促したい。この忌むしい卑劣なウクライナ戦攻という愚挙の時代の渦中にこそ、我々が真に胸に掲げたい名著中の名著そして名訳書である。

最後に訳者からの私信(便箋3枚の中の一部)を書き添える。「このところ三省さん*の詩にはまっています。とりわけ『びろう葉帽子の下で』は素晴らしく、繰り返し朗唱しています。とても気持がよくなります」

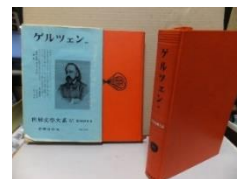
* (山尾)三省はカウンターカルチャーを生きた清貧の詩人、私の兄だ。

このような清廉な、篤実な訳者の祈りを込めた、ゲルツェンの、人間の尊厳のため、自由な言論のための実に74年ぶりの新訳である。私達は威儀を正して、本書のその今日的な存在理由を受けとめたい。

(長屋のり子、詩人、本会会員)

長縄光男さんの新訳を手にして 松田 潤

アレクサンドル・ゲルツェンという、私には朱の表紙の筑摩世界文学大系だ。菊判8ポ三段組の『過去と思索』をまず思い出す。小さな活字で組まれたが厚い二冊などもう老眼鏡に頼る今では読むのは無理だ。だいたいソ連が私の存命中になくなるなど思いもよらなかった頃だ。



ベトナム、パリ、チェコ、紅衛兵

最近長縄光男さんの新訳でゲルツェンの『ロシアの革命思想』が出された。私が長縄さんのお師匠さんの金子幸彦先生の旧訳を読んだのはもう50年以上も前になる。世界中でベトナム戦争反対、パリでは五月革命、ソ連はチェコの民主化運動への武力介入、中国は紅衛兵運動。日本は全共闘運動と重なる時代だというと、今この本を手にとって欲しい若い世代にとっては夏休みに田舎で祖父母から何度も繰り返される昔話を聞かされる気分になるのだろうか。

私がゲルツェンを読もうと思ったのは、「革命」という言葉にまだ現実味が感じられたそんな時代の雰囲気の中でだった。レーニンによる「ロシア革命」がスターリンで歪められてしまったのか、それともレーニンの革命そのものが間違っていたのか？ まずはその前に戻って考えようとしたのだった。

北大で

私が北大に入ったのは第二外国語にロシア語が昇格した年度だった。西洋哲学に学部移行をすると従来のデカンショ(デカルト、カント、ショーペンハウエルなどというのは、死語か)的なものでなく、ロシアのラヴローフをテキストに取り上げてもらった。しかも学生は私一人に教師二人だった。そんな恵まれた環境だったが、全共闘運動での石投げが忙しくなった私はさっぱり勉強もしないうちに、とうとう校舎をバリケード封鎖までしてしまった。当然ゼミは途中のままになった。

二度の流刑の後フランスに亡命したゲルツェンを気取る訳ではないが、私はバリケードが解除されて静かになったキャンパスの中で、挫折した「革命」を夢見たナロードニキ主義者のように呆然としていたと書くと、格好付けすぎだ。

ウクライナ、沖縄・広島・長崎、ガザ

そしてまた、この本を手にもまだ続くウクライナとロシアの戦争を考えると、ゲルツェンがいう小ロシア=ウクライナとポーランドの関係、フランス革命後のヨーロッパとロシア帝国、近代市民社会と遅れたままのロシア農村共同体。翻って、我が日本はといえば明治維新から、進んだ西欧に追いつこうとして大日本帝国を築くためにアジア諸国を戦渦に巻き込み、ロシア帝国との戦を朝鮮半島・満州で繰り広げ、最終的には沖縄での地上戦、広島・長崎の原爆投下で敗戦を迎えたという歴史をどう考えようか。ここにガザでのジェノサイドが加わる。ゲルツェンが悩んでいた問題は、私を悩ませる現在と通底していると、更に頭を抱えてしまうのは惚け老人の思い込みだろうか。

『革命のエチュード』『乙女の祈り』

気分を変えようとショパンの『革命のエチュード』を聴くが、祖国の独立運動を鼓舞するメロディーよりは、同じポーランドの女性作曲家バダジェフスカの『乙女の祈り』*の方が戦禍に苦しむウクライナとロシア、ガザの一般庶民には相応しいのではと思ってしまう。

*「《乙女の祈り》は世界初のミリオンヒット曲」ドクタ・ハワサ、POLE 85(2015.5)

雀が丘のゲルツェンとオガリョフの二人の語らいから松田道雄の『ロシアの革命』は始まったが、私もまた若かった頃に「革命」を語った古くからの友人とこの本、そして刊行が始まったと帯に書かれている『過去と思索』を手にも久闊を叙しながら一献傾けるのもありだろう。



(まつだ・じゅん、元札幌大学教員)

* <http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE85Maiden'sprayer.pdf>

POLE no.113 (August 2024)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Announcement: 38 th Annual Meeting and Reception	1
Report: Lecture and video screening “Katyn Forest Massacre and the Internment of Japanese in Mongolia and Siberia” (M. Sonobe, H. Ide, N. Tatebe)	2
Report: Lecture, video letter, and screening of the documentary film “Ainu - Indigenous People of Japan” (K. Kumagai, Y. Osada)	4
Essay: Ukraine, the land of the Cossacks, will not give in (S. Sakikawa)	6
Essay: Grażyna Bacewicz's Piano Sonata No. 1 - Japan Premiere (T. Tokuda)	7
Essay: Reception of F. Chopin in Japan (4) (M. Kawasome)	8
In memory of Mr. Teruo Matsumoto (Ch. Tsukamoto, Y. Ogata)	9
Book Review: Chiyomaro Shimoda’s Haiku in “Haiku in Space 2023 Selected Anthology” (F. Dake)	10
Academic exchange between the Health Sciences University of Hokkaido and the National Medical University of Lublin (S. Olejarz, K. Sato)	11
Masashi Kawasome Piano Recital in Arte Piazza Bibai Vol.5 / Takako Tokuda Piano Recital - The Lineage of Grażyna Bacewicz (Japan Premiere of Piano Sonata No. 1)	12
Book Review: “Du développement des idées révolutionnaires en Russie” by A. Herzen (J. Matsuda, N. Nagaya)	13